

越被成候にさへ會てかまひ不申候。我まゝに振廻申候。主人は腰ぬけに候。此上は我々數代、伊達の家來にて武名をけがし申儀は有間敷とて、何程制し候ても我等申儀を用不申候。然れば彼等に用られ家を立申儀は、全く上の御威光と奉存候旨被申候。其趣太閤御聞にて、其より政宗下知を家來ども用候様にとて、懇に致され無事に罷成候。是は權現様主人は腰ぬけに候へば、とかく被仰候事も無之候。其方ども料簡に有之儀と被仰候を、合點仕候ての儀と見え申候。隠語にて候かけ手もかけ手、扱又能解申儀と被存候。

一、細川越中守神君へ御金拜借

關原の時細川越中守殿三齋妻女を被殺候事も、權現様の被成候事に候。其仔細は秀次一儀の時、諸大名一味者有之哉と御吟味被成候。右政宗は音信を仕とて、それさへ右の通に候。然處に細川越中守殿、秀次より金子百枚借被申候。御詮議の時分、右の金子早速遣置候はねば、相知申首尾に罷成候得共、此時分金子拂底故に、百枚の金子急に難調候。越中守殿留守居、松井佐渡守と申もの、本多佐渡殿と別て

く被仰候。扱右の金子早速内證にて遣置候て、何の詮議にも不及埒申候。其後越中守殿伏見へ參觀の時分、内府公の下屋敷の前を通り被申候折節、山岡道阿彌と申御咄の相手、御前に罷在候時分、越中始て御出と申候。内府御聞被遊、是は珍敷事に候。御出珍重候とて、御逢被成候へば、越中被申候は、終に伺公不仕候へども、幸御門前を罷通申候。其上見申候へば、道阿彌家來も見申候故、不圖御見廻申上候。扱日頃望に奉存候間、今日御料理被下、御手前にて御茶を被下度奉存候旨被申候。内府被仰候は、道阿彌、是は道阿彌を御呼被成也越中殿など只今の茶湯者に候處、茶を手前にて進申事、晴成事に候。去共不調法ながら進可申候間、其用意申付候へと被仰候。成程疎なる料理にて、其上に越中殿被申候は、とてももの儀に、ひとりじめにて被下度よし被申候へば、内府、いや〜御一人と申儀は猶仕がたく候。道阿彌幸罷在候。是も古武者に候間、是をも加へ可申と被仰候處、達て越中殿望被申候故、道阿彌申候は、是は成程御尤成儀に候。跡にて私儀も御様子承可申候。越中殿御望の通りに被成可然旨申候故、其通にてかこひへ入被申候。扱

舊友にて候。越中殿は權現様と終に御出合も無之、日頃結句越中殿などは、太閤へ對候て徳川家へは無禮を態とする様なる事に候。然處右急切成儀に罷成候て、佐渡此方の佐渡へ申候て、何卒内府様御計ひ被下候様にと申候。こゝへよべと被仰候故、本多殿同道にて御前へ罷出候。段々御聞被成候て、扱々笑止成事に候。去共何とぞ成可申と被仰、扱何番目に有之御具足櫃を持って來候へと被仰候。則其御具足櫃御前へ持參候へば、御巾着の内より鎰御取出し被成、是にてあけ候へと被仰候。其かぶとの下と鎰の下に封じ有之封を、爲御切被成御覽候へば、年月書付有之候を被成御覽候處、最前駿河にいま被成御座候時分の年月にて、最早三十年にも及候。久敷事と被仰候て、其金子を佐渡に被下、是を以早速埒明候へと被仰候。佐渡頂戴いたし、難有儀奉存候。追付國元へ申遣候は、越中守方より此金子、早々返上仕にて可有之由申上候へば、いや〜其は大事の事に候。此金子の儀は表向へ申付候て、爲渡申儀も罷成候得共、表向の者どもに爲知申間敷とて、か様に具足櫃の内より取出遣申候。もはや此金子の儀は是迄にて、沙汰なし

かこひにて本多佐渡守をよび出し申され候。佐渡に被申候は、先頭家來方より大節の儀御自分迄申入候處、御懇意故大難を遁れ申事、此御恩難忘存候。何とぞ此御恩を報じ可申所存に候間、其證據には是が參りはじめ、又參りをさめに候とて立被申候。其後關原にて御味方いたされ、妻子を捨被申候事、此時の一言故に候。然ば越中殿に妻子を爲捨候は、權現様被成事にては無之哉と、新井氏被申候。

一、台徳公神池の鰻取者御仕置

台徳院様、伊豆の三嶋を御通の時分、御旅宿にて御寢成候時分、御側にて御近習衆へ物語御させ被成候。去人の咄に此前御供にて、此三嶋を罷通候時分、何の何某が仲間、きつきやつにて、三嶋の神池のうなぎを取候て、かばやきにいたし候。神のうなぎとて、人々おそれ候へ共、上様の御供にて罷通候時分、神も何の祟可有之とて、被下候と咄申を、御寢成ながら御聞被遊、御起あがり被成、今の咄は何と、被仰候處、又かやう〜と申候時、本多佐渡を呼に遣候へと被仰候。佐渡參候へば、今の咄を佐渡に仕爲聞候へと被仰候故、又咄申候。其時明日早速此者、三嶋の町端に